

親鸞仏教センター通信

2012.
September

2012年9月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

第42号

批判される「感情的」言説

親鸞仏教センター研究員 春 近 敬

「感情的にならずに、冷静に広く議論を尽くしましょう」。異なる意見が衝突した際にしばしば用いられる言い回しである。この言葉には、ある一つの前提がある。それは「感情的」という言葉が否定的な意味合いで用いられていることである。感情的であるということは、「冷静」、すなわち理性的であることよりも価値が低く、物事を進めるにあたって排除されるべきこととされている。

このように、感情的であることが批判の対象となるような言説は、すでに明治時代の後期に見ることができる。清沢満之とその門弟らによる雑誌『精神界』を中心とした精神主義に対して、常識主義を掲げる雑誌『新仏教』に集う仏教青年たちの批判であった。精神主義は、相対有限である私たちの思い描く道理や道徳、社会的な規範や価値観などは、所詮は相対有限の限界を超えることはできず、どこかで破綻するものと考えた。したがって、相対有限の所産であるこれらに自分の立脚地を置く以上、精神的な苦悩と不安定は免れない。絶対無限にその立脚地を定めることで、はじめて自分の心の内面に平安を得ることができるとする。これに対して常識主義とは、正しい知識や道理に沿って理性的に求められた仏教こそが「健全なる信仰」であり、新しい日本の時代社会に即応したものであるという主張である。社会的価値に背を向ける精神主義は感情的な「病人の信仰」であり、すでに心身の困難に苦しむ者の一時の慰めにこそなれ、大多数の国民にとってはむしろ生きる力を奪うものであると批判したのである。しかし、彼らの多くは、「健全なる信仰」の立脚地となる知識や道理をその根拠から批判的に問い直していくことまではしなかった。ただ、日清戦争から日露戦争に突き進んでいった当時の社会常識に沿うことが「理性的」な理解とされた。そのため、結果的には当時の天皇を中心とした倫理観を自明のものとして追認することとなったのである。

この批判の枠組みは、現代の議論においても大きな示唆を与えるものである。私たちが「理性的」だと思っている言葉は、本当に揺るぎない根拠をもっているのか。反面、「感情的」な言葉というものは、本当に除去すべき雑音に過ぎないのか。清沢に言わせれば、「感情的」ということも「理性的」ということもあくまで相対有限の範疇^{ちゆう}であって、そこに最終的な立脚地を置いてしまえば、あたかも「浮雲の上に立ちて芸芸を演ぜむとする」(清沢満之「精神主義」)ようなことになる。そうなれば、双方ともに足をすくわれて転倒してしまうようなことにもなりかねないのではないかと考えるのである。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」②②

しゆく ごう いん ねん

宿業因縁の命の自覚

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第51回、52回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、「第二十二願」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第48回から一部を紹介する。（嘱託研究員 越部良一）

■「天国」を求める心

法蔵菩薩の名前で本願が浄土をつくりたいと。その浄土のなかの命を「国中天」と呼ぶことが多い。六道流転、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上という、この六つのあり方を命はぐるぐる回るとするのが、インドの神話的な人間理解なのですが、どういう状況が与えられるかということも宿業因縁です。そのなかで一番よい状況が人天、人間と天上です。

天上というのは広くいえば「天国」です。天国ということで、何か身体の物質部分がなくなって、精神的なものだけがあるようにイメージする。曾我量深先生は、仏教に触れないならばどのような宗教であっても、人間が求めるものは天国だと、おもしろいことを言っておられます。つまり、天人になりたいのだと。天人は身体がないから自由自在です。自由に飛んでいけるし、縛りはありません。つまり、宿業がないのです。

行為した結果、その行為の蓄積が自分に集まって、自分だけではない、自分と一緒に生きている周りのものにも影響を与えて、そのこと

が不自由、縛りをもってくる。人間は、縛られるのは嫌ですから、自由でありたい。特に、ヨーロッパ近代の中心的な価値として、近代的自由ということが謳歌されてきた。しかし、これは仏教からすれば天人なのです。もともと身があれば、身は親から生まれるのですから、親から生まれたとたんに、もう自由ではありません。自分で欲するような身体を自分で得たわけではないですから、はじめから宿業因縁なのです。それをヨーロッパの文明は近代的自由という概念を生みだして、あたかも人間が自由になっていけるような錯覚を与えました。

だから、このごろはお葬式の弔辞で、亡くなった方は天国に行ったというように、多くの人が言うのは、これで自由になってよい世界に行ったのだと言いたいわけです。そういうふうに見たいわけです。それに何の矛盾も感じていないのが近代の日本人の常識でしょう。

法蔵菩薩が、本当の人間を生み出すような力をもった場所を開きたい、という願いで国中天と呼びかける。ところが、それを聞いて浄土を獲ようとする、そこに親鸞は深い自力の罪を見た。人間が願いとして思えるのは天国である。その衆生はみんな自由で、美しくて、お互い縛りがなくて、何かフワフワして、とてもよい場所、これに人間は弱いのです。その天国のなかに埋没していくようなかたちで、如来の世界を名号を通じていただこうとする。そういうことが第二十願というものが教えている、人間の脱皮できない深い闇である。

■ 宿業因縁の悩み

曾我量深先生は「私は、知識人は嫌いです」と言っておられました。あんなに難しいことを言う先生の文章を、知識人以外の誰が読むのかと思うのですが、曾我先生が言われる「知識人」とは、自分はさておいて理性で論理を考える人のことです。そういう態度では本当の仏教の真理に触れることはできない。これは非常に厳しい言葉です。結局、宗教問題は評論家が何か対象を論ずるのと違って、自分自身の宿業に自分が傷ついて脱出できない悩みをどうしたらよいかという問題抜きに、出遇うことはできないと思うのです。天国を求めるような心では、本当の仏教の精神に触れることはできません。

つまり、人間はどこかでわかるというかたちで安心し、自分のわかるところで納得するということがあるのですが、宿業因縁の問題はわかりません。なぜ私はこの両親から生まれなければならないのかと言っても、答えはありません。しかし、事実はあります。けれども論理的原因があるわけではなく宿業因縁があるので。このことは、仏教がそういう言葉で呼びかけているのだと気づくしかありません。だから「業感縁起^{ごうかんえんぎ}」という言葉があります。業に感ずる。感ずると言っても、単なる感情ではありません。感得すると言いますか、うなずくという言い方をするのですが、その出遇いを抜きに、たすけてくれるという感覚で本願をとらえることを親鸞聖人はご和讃で「疑心の善人」(『真宗聖典』506頁、東本願寺出版部)と言っています。よい世界に行くと信じて念仏を称えるのは、その「信」自身が疑い心なのです。善人というのは、天人と重なるような善人です。宿業を引き受けない心と言ってもよい。外側からものを見ている態度で、自分の実存的な責任を自分で本当に取りうとはしないことです。

宿業に縛られた存在、特に罪について、自分が罪の存在だということを、人は見たくもありません。自分の責任だとも思いたくもありません。結局、自分がこのように生まれて生きているということは、自分の自由に行為をした責任、

ではないのですが、これを生きるべく命が与えられているのだと引き受けるしかない。そういう意味の責任。自分でそれに気づけるかという、気づくことができないので、明々白々に存在を照らし出すものを、如来の智慧と言うわけです。如来の智慧に照らし出された自己、これは嫌とは言えない。つらい因縁であろうと、嫌な因縁であろうと、そういう因縁を引き受けて生きるしかない。これを逃げて救いを求めるのは、その心が善人です。善人は天人であるというのは、そういうことです。自分自身のつらい嫌な面からは逃げて、よいところで生きていけると思いながら、そのために仏の名を称える。仏の場所は自由になれる場所だと思って、そういう世界を要求するその心は、実は深い疑い心なのです。

仏教の信は、自己自身の成り立ちを深く知って信ずることです。この信のところに、いわゆる悪人正機や機の深信などと言われる、宿業因縁の命の自覚があるので。そのことを本当に如来の智慧としてうなずくことができるということは、自分だけがそういう因縁に苦しんでいるのではなく、みんなそうなのだとうなずけることです。如来の智慧から照らされれば、みんな宿業因縁に傷つき、苦しみ、もがいているのだと。こうした眼のうえに本当の平等の世界を開いていこうとするのが、法蔵菩薩のお心であると思うのです。(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は、公開(無料)で開催しています。

記

日時：2012年 9月 休会
10月19日(金)午後6時30分～9時
11月13日(火)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗^{せいしん}聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000
ご希望の方は、下記(京都・東本願寺出版部)まで。
TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211
<http://books.higashihonganji.or.jp/>

現代と親鸞の研究会・第41回

黙過する「神」

—ドストエフスキー『悪霊』の世界—

東京外国語大学学長 亀山郁夫



亀山郁夫 氏

2012年4月4日、東京ガーデンパレス（文京区）において、東京外国語大学学長の亀山郁夫先生をお迎えし「黙過する『神』—ドストエフスキー『悪霊』の世界—」というテーマで「現代と親鸞の研究会」を開催した。氏はドストエフスキーが『悪霊』で何を本当のテーマとしていたのか、またそれは現代のわれわれにどのような意味があるのかについて、いくつかのキーワードをもとに述べられた。以下に、その一部を報告する。（囑託研究員 田村晃徳）

■『悪霊』のテーマ

私が『悪霊』の最大のテーマと見たのは、スタヴローギンという神がかり的な男と、マトリョーシャという少女との関係でした。『悪霊』をお読みになった方はわかるように、スタヴローギンはマトリョーシャを凌辱します。そして、この少女がスタヴローギンのアパートのドア口に現れ、彼に抗議するのです。その後、彼女は同じ階の鶏小屋のような納屋に入っていくのです。その様子をスタヴローギンはずっと見ているのです。

その少女が納屋で死のうとしていることを、スタヴローギンはもちろん察知しています。しかし、察知していながら彼は微動だにすることなく、ある一定の時間をアパートの自室で待ち続けるのです。そして、彼がそのようにしている何分かの間に、少女はその納屋のなかで首をつって死ぬのです。しかもなおかつ、スタヴローギンは誰にも気づかれないように廊下に出てその納屋の入り口まで行き、羽目板といま

しょうか、板の隙間から少女の死体を覗くのです。

そのような行為がこの『悪霊』の最大のテーマであり、悪霊たるゆえんであると思うのです。今まで言われてきたように、いわゆる革命結社が自分たちの仲間を殺したという、人の命を命と思わないような、そうした革命家たちの非人道さが『悪霊』のメインテーマなのではなく、むしろ、スタヴローギンが少女の苦しみや悲しみから、まったく自分を隔絶させ、そして好奇心そのものの塊と化して、その状況にいる、そういう視線の在り方が問題なのです。

■アウラの経験

私はヴァルター・ベンヤミンの言葉にならってそれをアウラの喪失と呼んでいます。スタヴローギンという男が少女の死体を覗くという、その行為のもつ恐ろしさにまつわるある種の即物的な感覚、正確には負のオーラと言えるのでしょうか。つまり、目の前の出来事を、ただ単に事実としてしか受けとめることができず、その事実が放っているメタフィジックな感覚を経験できなくなっている事態です。

『悪霊』のスタヴローギンの「告白」のなかで、何度も述べられているのは、すべて運命を彼自身が担っていることです。つまり、マトリョーシャという14歳の少女が納屋に向かって行くときに、彼は追いかけて彼女を救うことができたはずですが、それをしませんでした。

普通の人間ならばという言い方は変ですが、そういう状況で取るべき人間としての行動を一切取らずに、彼自身が神的な視点に立ってしまう。そして、その神的な視点に立つことにある

種の快樂を覚えるわけです。この人間の根本的な欠陥がどこにあるのかということをドストエフスキーは探求していくのです。

では、先ほどの「アウラ」とは一体何かというと、ある物体なり人間なりから何らかの働きかけを受けることを意味しています。つまり、その対象（オブジェ）との関係性のなかで、ある種のオーラを経験するということです。

例えば、私が一人の男性や女性を見て、そこから何かを感じることがあります。魅力的に思ったり、あるいは批判的なものを感じます。ですから、人間としての単なる輪郭ではなくて、その輪郭を包み込んでいるある種の精神的な働きかけというものを経験できるということ、これがアウラなのです。

■ アウラの喪失

しかし、もしこういった対象がすべて輪郭でしか経験できなくなってしまうと、つまり人間が視覚だけの存在と化してしまえば、それは一切のオーラを喪失した「目だけの人間」ということになるわけです。われわれの現代の世界において「目だけの人間」は、ことによると無数に存在するのかもしれないのです。それは私にとってのみならず、世界が痛感すべき悲劇と言ってよいでしょう。

『悪霊』で言えばスタヴローギンの、少女に対して好奇心の塊と化すという、いわば剥き出しのかたちで現れてくる欲望は、対象に対するアウラとどう関係しているのかという問題が出てくるのです。ドストエフスキーは、実はここで何かしら根本的なテーマを呈示しようとしていたのではないと思われるのです。

そこで、ドストエフスキーが『悪霊』でテーマとして描いていったのがスタヴローギンという、最も悲劇的な人間だったのです。この人間を徹底的に解剖すれば、同時代の革命思想がもっている問題点や限界を全部解明できると思いました。スタヴローギンが犯したさまざまな犯罪は、アウラを喪失した人間の行き着く先の悲劇だということです。

つまり、当時の革命を担っている人々は、結局は最終的にこういうところにたどり着いてし

まう。唯物論を革命の原理にするということは、アウラの存在の否定を意味するわけで、最終的にはスタヴローギン自身が行った少女凌辱というところにまでたどり着きます。そこまで行かないと革命は実現できないのだという、そういう革命家たちのメンタリティを絶対に許さないという思いがドストエフスキーのなかにあったのです。その意味において『悪霊』のテーマを、最終的にはすべてスタヴローギンという人間像のなかに集約させていったということなのです。（文責：親鸞仏教センター）

※亀山郁夫氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第26号（2013年6月1日号）に掲載予定です。

亀山 郁夫（かめやま いくお）東京外国語大学学長

1949年栃木県生まれ。東京外国語大学外国語学部ロシア語学科卒業、東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。1982年天理大学外国語学部助教授、1987年同志社大学法学部助教授、1990年東京外国語大学外国語学部助教授を経て、1993年同教授。2007年東京外国語大学学長に就任。

著書に、『甦えるフレーブニコフ』（晶文社／平凡社ライブラリー※後者は『甦る一』）、『終末と革命のロシア・ルネサンス』（岩波書店／増訂版岩波現代文庫）、『破滅のマヤコフスキー』（筑摩書房）、『露のロシアースターリンと芸術家たち』（岩波書店）、『熱狂とユーフォリアースターリン学のための序章』（平凡社）、『ドストエフスキー 父殺しの文学（上・下）』（日本放送出版協会）、『「悪霊」 神になれたかった男』（みすず書房）、『大審問官スターリン』（小学館）、『カラマゾフの兄弟』続編を空想する（光文社新書）、『ドストエフスキー 謎とちから』（文春新書）、『ドストエフスキー 共苦する力』（東京外国語大学出版会）、『「罪と罰」ノート』（平凡社新書）、『ドストエフスキーとの59の旅』（日本経済新聞出版社）、『チャイコフスキーがなぜ好き』（PHP 新書）など多数。最近の訳書に、ジョン・アードイン『ゲルギエフとサンクトペテルブルグの奇蹟』（音楽の友社）、ドストエフスキー『カラマゾフの兄弟』（全5冊）、同『罪と罰』（全3冊）、同『悪霊』（全3冊）、同『悪霊 別巻「スタヴローギンの告白」異稿』（以上光文社古典新訳文庫）など多数。なお、『アンジャリ』第21号に「ひとつの悲観論」をご執筆いただいている。



「現代と親鸞」の研究会（於：「東京ガーデンパレス」）

こころえやすからんとて、しるせるなり。

康元二歳正月二十七日

愚禿親鸞八十五歳 書写之

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』五五八〜五五九頁)

えりみず、ただひたすら、愚かなるものが心得やすいようにと、
記したのである。

康元二歳正月二十七日

愚禿親鸞八十五歳 これを書写する

試訳をめぐって

【原文】多念にとどまることをやめ、一念にとどまることをとどめんがために、法蔵菩薩の願じまします御ちかいなり。

【現代語訳】数多く念仏せねばならないとこだわ
る心を止めさせ、あるいは念仏は一回称えるだ
けでよいとする心を止めさせるために、法蔵菩
薩が願われたお誓いである。

「多念にとどまる」、この文は当初「数多く念仏することにとらわれ」と試訳されていた。しかし、その訳では、数多く念仏するという実践にとらわれていることになるのではないだろうか。「とどまる」という言葉には、善しとする心^{こころ}というニュアンスがあるように思われる。すなわち、多念がよいと思ったり、一念がよいと思ったりするその^{こころ}に問題の所在があるのではないか。現代語訳では、そのことを十分に反映できる訳を目指した。

加えて、これでいいのだと自分を納得させるような、そこで終ってはだめだということが法蔵の誓いであるという文章内容になっていることが非常に考えさせられるという感想が、本研究会場で述べられていたことも記しておきたい。

(訳：親鸞仏教センター)

『唯信鈔文意』の現代語化を終えて

親鸞仏教センター嘱託研究員 法隆誠幸

『歎異抄』に引き続き行なわれてきた『聖典』の試訳、『唯信鈔文意』の現代語化であるが、四年半(二〇〇六年九月二十九日)〜二〇一一年四月十三日、延べ五十九回に及び研究会を経てその作業を終えることとなった。

本研究会は、異分野を専攻する研究員たちが集い、また立場も世代もまったく異なる人々が一つの『聖典』試訳に取り組むというもので、そうして紡ぎ出された言葉がこのたびの現代語試訳である。その過程においては、現代語化されることで原典のもつ迫力、文章のリズムといったものがスポイルされてしまわないかという懸念がいつも付きまとい続けた。わかりやすさを求めれば、試訳は説明的になり、つまらないものになってしまう。何より、親鸞の意に沿うことを心がけながらもその意味内容を開き進めようとするれば、そこには必ずと解釈が入り込んでいく。それでも、「現代」というフィルターを潜^{くぐ}って試訳がつけられることには、少なからず意義があるのではないだろうか。

『唯信鈔文意』は、その奥書が示すように「いなかのひとびと」すなわち関東の同朋(生活者)に向けて書かれたものである。人間として共有したい、共に考えていきたいことがあるからこそ、親鸞は繰り返し繰り返し書き付けたのだらう。本試訳が、教えの言葉(原典)にふれる契機となれば幸いである。

本紙への掲載は今号をもって終^{しま}りとなる。すべての内容は再編集され今後まとめられる予定であるが、その際にはぜひ手に取っていただきたい。

らねども、五逆のつみのおもきほどをしらせんがためなり。「十念」というは、ただくちに十返をとなくべしとなり。しかれば、選択本願には、「若我成仏 十方衆生 称我名号 下至十声 若不生者 不取正覚」(往生礼讃)ともうすは、弥陀の本願は、とこえまでの衆生、みな往生すとしらせんとおぼして、十声とのたまえるなり。念と声とは、ひとつこころなりとしるべしとなり。念をはなれたる声なし。声をはなれたる念なしとなり。この文どものこころは、おもうほどはもうさず。よからんひとにたずぬべし。ふかきことは、これにてもおしはかりたまうべし。

南無阿弥陀仏

いなかのひとびとの、文字のこころもしらず、あさましき愚痴きわまりなきゆえに、やすくこころえさせんとて、おなじことを、たびたびとりかえしとりかえし、かきつけたり。こころあらんひとは、おかしくおもうべし。あざけりをなすべし。しかれども、おおかたのそしりをかえりみず、ひとすじに、おろかなるものを、

である。念と声は同じことだ、と知りなさいというのである。念をはなれた声はなく、声をはなれた念もない。これらの文の意は、十分に言い尽くしたわけではない。よく心得ているであろう方にたずねなさい。深い意味は、以上申し上げたことから推し量っていただけでしよう。

南無阿弥陀仏

都から離れたいなかの人々は、文字というものも知らず、浅はかで愚かであることきわまりない。そのような人々が、よく心得られるようにと、同じことを、何度も繰り返し返し繰り返し、書きつけたのである。すでに心得ていると思っっているような人は、きつとおかしく思い、嘲るに違いない。そうではあるけれども、多くの人の誇りをか

親鸞仏教センターの動き

(2012・5・7) 抄出

■2012年

- 5・1 第12回「尊号真像銘文」研究会
- 5・11 親鸞聖人ご命日のつどい
- 5・16 第25回「教行信証」真仏土・化身土巻研究の解明(通算・第102回) 連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 5・17 第18回英訳「教行信証」研究会
- 5・29 第18回清沢満之研究会
- 6・4 第19回清沢満之研究会「明治の仏教青年 新しい仏教運動への道」 舞鶴工業高等専門学校准教授・吉永進一氏(千代田区・東京国際フォーラム)
- 6・5 第7回親鸞仏教センター研究交流サロン「自己責任」を問い直す―他者への温かな関心を取り戻すために― 東京経済大学教授・桜井哲夫氏、大谷大学准教授・藤枝真氏(千代田区・東京国際フォーラム)
- 6・13 第58回研究検討会議(研究・交流・出版等の企画)以降、定期的に会議を開催。
- 6・18 第13回「尊号真像銘文」研究会
- 6・22 第52回(通算・第103回) 連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 6・25 本多弘之所長「真宗大谷派字階」講師・授与並びに董理院董理院就任記念講演会及び祝賀会(千代田区・学士会館)
- 6・29 第26回「教行信証」真仏土・化身土巻研究会
- 6・29 第120回英訳「教行信証」研究会
- 7・1 第120回清沢満之研究会
- 7・4 人事発令(前田専学客員研究員が再任)
- 7・6 第53回(通算・第104回) 連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 7・24 第142回英訳「教行信証」研究会
- 7・30 第27回「教行信証」真仏土・化身土巻研究第120回清沢満之研究会
- 8・1 人事発令(越部良一、法隆誠幸が嘱託研究員として再任)

にとどまるころをやめ、一念にとどまるころをとどめんがために、法蔵菩薩の願じまします御ちかいなり。

「非権非実」（『唯信鈔』）というのは、法華宗のおしえなり。浄土真宗のころにあらす。聖道家のころなり。かの宗のひとにたずぬべし。

「汝若不能念」（『観経』）というのは、五逆十惡の罪人、不浄説法のもの、やもうのくるしみにとじられて、ころに弥陀を念じたてまつらずは、ただ、くちに南無阿弥陀仏となえよとすめたまえる御のりなり。これは、称名を本願とちかいたまえることをあらわさんとなり。「応称無量寿仏」（『観経』）とのべたまえるは、このころなり。「応称」は、となうべしとなり。「具足十念」称南無無量寿仏 称仏名故 於念念中 除八十億劫 生死之罪（『観経』）というのは、五逆の罪人は、そのみにつみをもてること、と八十億劫のつみをもてるゆえに、十念南無阿弥陀仏となうべしと、すすめたまえる御のりなり。一念にと八十億劫のつみをけすまじきにはあ

「非権非実」（『唯信鈔』）というのは『法華経』を宗としている天台宗の教えであり、浄土真宗では用いない。聖道門の人の考えである。このことはその宗の人にたずねなさい。

「汝若不能念」（『観無量寿経』）というのは、五逆・十惡を犯した罪人や私利私欲のために法を説いた者が、病の苦しみにさいなまれ、心に阿弥陀仏を想い念じることもしないならば、ただ口に「南無阿弥陀仏」と称えよと勧めてくださっているみ教えである。

これは、称名こそ本願の誓いである、ということを表わしているのである。「應称無量寿仏」（『観無量寿経』）と説かれているのは、この意味である。「應称」とは、称えなさいということなのである。

「具足十念 称南無無量寿仏 称仏名故 於念念中 除八十億劫 生死之罪」（『観無量寿経』）というのは、五逆罪を犯した人がその身に背負う罪は、八十億劫という永きにわたって重ねられた罪のさらに十倍にもあたるほどのだから、十声、南無阿弥陀仏と称えなさいとお勧めになったみ教えである。もちろん、一声の念仏によってもそのような罪が消せないわけではない。しかし、五逆という罪の重さをしっかりと自覚させるために、あえて「十念」と言うのである。「十念」とは、ただ口に十遍の念仏を称えなさいということである。だから、選択本願を善導大師は「若我成仏 十方衆生 称我名号 下至十声 若不生者 不取正觉」（『往生礼讃』）と言われるのである。これは、阿弥陀如来の本願においては、たとえ十声称えただけでも皆往生するということを知らせようと、「十声」と言われるの

『聖典』の試訳（現代語化）

一声の念仏で救われるのか、それとも数多く称えることで救われるのか……。この一念・多念の論争は、法然門下のみならず親鸞を慕っていた関東の門弟の間でも大きな問題となっていたようである。一念であろうと多念であろうと、互いの主義主張に執することは両者の溝を深めていくばかりである。

そこに親鸞が見たのは、念仏申すということの根本問題ではなかったか。すなわち、念仏は「法蔵菩薩の誓願の念仏である」という意識の欠落である。阿弥陀の誓願を信じていないから、そのような一念・多念という数の発想が出てくるのではないか……。つまり、一念・多念の論争は念仏における分限の問題である。親鸞は、一念も信心の問題、多念も信心の問題として、念仏の要は信心であることを述べている。ここに、念仏の回数を経験とするいわゆる自力執着の立場から、すべてを阿弥陀に任せるといふ他力への大転換がある。

（囑託研究員 法隆誠幸）

『唯信鈔文意』試訳 ⑱

原文

「不簡破戒罪根深」（五会法事讃）というは、もろもろの戒をやぶり、つまふかきひとを、きらわずとなり。このようは、はじめにあらわせり。よくよくみるべし。

「乃至十念 若不生者 不取正覚」（大經）というは、選択本願の文なり。この文のころは、乃至十念のみなをとえんもの、もしわがくにうまれずは仏にならじとちかいたまえる本願なり。「乃至」は、かみ・しもと、おおき・すくなき・ちかき・とおき・ひさしきをも、みなおさむることばなり。多念

現代語訳

「不簡破戒罪根深」（『五会法事讃』）というのは、諸々の戒を破る人も罪深い人も、分け隔てせず、排除しないということである。このことについては、すでに述べているので、よくご覧いただきたい。

「乃至十念 若不生者 不取正覚」（『大無量寿経』）というのは選択本願の文（第十八願）である。この文の要は、阿弥陀如来のみ名を「乃至十念」称えるものが、もし私の国に生まれないならば、私は仏には成るまい、と誓われた本願なのである。「乃至」は、上と下、多いと少ない、近いと遠い・久しいをも、すべて収める言葉である。数多く念仏せねばならないとこだわる心を止めさせ、あるいは念仏は一回称えるだけでよいとする心を止めさせるために、法蔵菩薩が願われたお誓いである。

● 清沢満之研究会報告 ⑫ ●

明治の仏教青年

—新しい仏教運動への道—

親鸞仏教センター研究員 春 近 敬

2012年6月4日、東京国際フォーラム（千代田区）にて、舞鶴工業高等専門学校准教授の吉永進一氏をお招きして「清沢満之研究会」を開催した。「明治の仏教青年—新しい仏教運動への道—」という講題でお話をいただいた後、研究員を交えて活発な議論が交わされた。当日の話題は多方面にわたるものであったが、紙幅の都合上、ここではその一部を紹介する。

■ 近代仏教の国際性と同時多発性

近代仏教とはグローバルな現象である。旅行と通信の高速化による「時間と空間の圧縮」がなされた近代の到来は、一つの国の伝統によってその国の宗教が成り立っていた時代の終焉でもあった。日本の仏教者が欧米に渡り、また海外の宗教家が来日するなど、国内外のさまざまな要素が入り込むことによって仏教の変革がなされたのが近代仏教である。そのため、これらの動きは、日本という地域性を超えた視点からも考察する必要がある。

そして国内においても、清沢満之（1863～1903）の精神主義、田中智学（1861～1939）による日蓮主義の国柱会、各宗派の外からの近代化をめざした雑誌『新仏教』など、同じ時代にさまざまな流れが発生した。それらが、それぞれに仏教の近代化を進めていくなかで互いに交流し、あるいは衝突しながら、総体としての「近代仏教」を構築してきたのである。

■ 仏教青年たちの世代

明治時代の仏教青年たちは、世代ごとにおおむねの傾向を見ることができる。まず、島地黙雷や村上專精に代表される1830～40年代生まれの「第1世代」がある。次に1850年代生まれの「第1.5世代」と呼ぶべき世代があり、井上円了、平井金三、中西牛一郎、釈宗演らがこれにあたる。その次が1860～70年代生まれの「第2世



吉永進一（よしなが しんいち） 舞鶴工業高等専門学校准教授

1957年生まれ。京大文学部生物学科卒業、同文学部宗教学専攻博士課程修了。1995年より舞鶴工業高等専門学校に勤め、講師を経て人文科学部門准教授。2007年12月、論文「原坦山の心理学的禅：その思想と歴史的影響」で「湯浅賞」受賞。専門は宗教学、ウィリアム・ジェイムズ、近代霊性思想史。近年は平井金三、「新仏教」など、近代仏教研究に携わる。

編著に「日本人の身・心・霊 近代民間精神療法叢書」（クレス出版）、翻訳に「天使辞典」（創元社）、「エリアーデ宗教学の世界—新しいヒューマニズムへの希望」（せりが書房）など。

代」であり、仏教の近代化を担った仏教青年の多くはこの世代に集中している。田中智学、清沢満之、鈴木大拙、近角常観、境野黄洋、古河老川、杉村楚人冠、姉崎正治など多数が挙げられる。

第1世代は江戸時代の学問を学んだ世代である。これに対して、第1.5世代は初等教育こそ江戸時代のものであるが、その後、洋学校に入って最初に英語を学んだ世代である。この第1.5世代の特有の時代環境が、後の第2世代の仏教運動の思想的源泉となった。井上円了（1858～1919）はそれまでの仏教をそのまま復興させるという発想をせず、『真理金針』『仏教活論』で近代における新たな仏教のありかたを示した。中西牛一郎（1859～1930）は『仏教革命論』を著して仏教改革を強く主張し、また「新仏教」と

いう言葉を始めて用いた。

■ 海外の「仏教徒」

明治時代の仏教界は、海外において仏教が隆盛しているというイメージをもっていた。アメリカで仏教が流行しているという情報が『反省会雑誌』（後の『中央公論』）などに掲載され、同誌の読者とアメリカの「仏教者」との間で文通が交わされた。また『海外仏教事情』という雑誌も創刊され、現地からの手紙が紹介された。実際にはこれらの「仏教徒」とは、神智学と呼ばれる宗教運動の運動家たちである。彼らは18世紀の神秘思想家スウェーデンボルグ（Emanuel Swedenborg, 1688～1772）の思想を通じて仏教を理解し、また神智学の創始者ブラヴァツキー（Helena Petrovna Blavatsky, 1831～1891）やオルコット（Henry Steel Olcott, 1832～1907）らの本を読んで、自らを「仏教徒」と考えたのであった。彼らが欧米で展開していた宗教運動の様子を、日本の仏教者は、海外でも時代の変化とともに仏教が盛んになっているのだと理解したのである。現代の感覚ではいささか考えにくいことのようにも思えるが、当時『反省会雑誌』『海外仏教事情』を読んだ相当数の知識人がこれを信じていたことが明らかになっている。そして「欧米でもキリスト教は衰退しており、仏教の時代が到来しつつある」という理解が、その後の仏教青年たちの時代認識に大きな影響を与えたのである。

■ 学理と経験

井上円了は、仏教とはこれまでのように限られた僧侶の手に握られたものではなく、万人のものであると訴えた。それは、仏教は「道理界中の宗教にして、学者社会の教法」（『真理金針』）であるからだとした。つまり、仏教とは学問的な宗教であり、仏教の真理は自然科学の道理と合致するものだという考えが円了の仏教論の前提であった。この「知識人の宗教」としての仏教という枠組みは第2世代の仏教青年たちにも受け継がれ、彼らの仏教論の基本となった。

しかしながら、「知識人の宗教」としての仏教を基本としながらも、円了の啓蒙的な仏教論はそのままには受け継がれなかった。本願寺派僧侶の古河老川（1871～1899）は「仏教は学理的宗教なりと云うを聞き……真理と信じ居たり」（「懷疑時代に入れり」『仏教』1894年1月号）

と述べている。円了の言うとおり、仏教の真理と学問は素朴に一致すると信じていた。しかし、実際の世の動きを見る限り、そう簡単には一致しそうにない。むしろ、自分たちの宗教的信仰は合理的批評によって危機に瀕している。そこで古河は、宗教的行為によるある種の神秘体験を学理に付け加えることで信仰を得るべきだという方向性を打ち出した。神秘主義に限らずとも、この個人の宗教経験を仏教に持ち込んで語るという考え方は第2世代の仏教青年に特有のことであり、仏教を万人の普遍的真理であると考えていた円了にはなかったことである。これには、先に述べたように神秘思想である神智学が「海外の仏教」として紹介され、多くの仏教者の目に触れた影響もあるとされている。

この古河の考えを批判したのが杉村楚人冠（1872～1945）であった。杉村はそのように内面に落ち込まず、仏教を現実の時代社会のなかで再解釈して活かしていくべきであって、仏教者は具体的な社会活動に携わるべきだと主張した。これは雑誌『新仏教』の基本論調となり、同誌による激しい精神主義批判などはこの観点によるものである。しかし、『新仏教』が完全に「外向き」だったかというところではなく、むしろ、個人の内面に向かう傾向が『新仏教』を含めた当時の仏教青年たちに共通してあったからこそ、外部へのより厳しい批判となって現れたのだと理解すべきである。いずれにせよ、仏教は個人の内面に向かうべきか外の社会に向かうべきか、という近代仏教の議論の一つの対立軸は、このようなプロセスを経て発生したと見ることができるのである。

※吉永進一氏の講義と質疑は、『現代と親鸞』第26号（2013年6月1日号）に掲載予定です。



「清沢満之研究会」（於：「東京国際フォーラム」）

第 9 回「親鸞仏教センターのつどい」を開催（4月7日）

親鸞仏教センターでは、4月7日、第9回「親鸞仏教センターのつどい」を開催した。午前10時30分から仏間において勤行。その後、会場を「学士会館 本館」（千代田区）に移し、記念講演と交流懇談会が行われた。例年、有識者のみで招いての「つどい」だが、今回は、講師のご希望とセンターが設立10周年を迎えたことを記念し、講演を一般公開し、抽選の結果、招待者と合わせて合計約250名の方に参加いただいた。

まず、作家の辺見庸氏（写真上）の、「来るべき死と滅亡のために」と題する講演では、氏が東日本大震災で被災した出身地の石巻市を訪れ、現地で目の当たりにされたこと、ご親戚の方などに聞かれた震災直後の惨状を、芥川龍之介の『羅生門』や、鴨長明の『方丈記』の描写に触れながら話された。そして、私たちは、滅亡と非常に近い距離にありながら、そのことについて哲学的に構築してこなかったとして、「われわれが、どういう奈落に立っているのかという危機の深さを、腑に落ちるように話す言葉がない。数値でしかものを言えないならば、『方丈記』や『羅生門』の世界のほうが、人間の奥底に迫っているのではないか」とマスメディアや宗教など、さまざまな分野に対して、そのあり方を根底から問われた。

また、死刑制度について、大道寺将司氏（死刑囚）との対話に言及しつつ、世論のなかに、死刑を次々と執行していかばよいという考え方があることの恐ろしさを峻烈に提起され、最後に「死刑反対運動にも、死刑を黙認してしまう論理を用いてしまっている。それは、宗教者の間にもある。黙認しないことを、何とか集団や宗派ではなく、自分の身体を張った行為として発信していくべきではないか」と力強く話された。

続いて、本多弘之所長の「宗教的な死の意味と平等の救い」と題する講演では、「われわれは、身が死ななければたすからないと、あきらめる必要はない。どれだけつらい人生を生きざるをえなくとも、それをひっくり返すような教えが、如来から来ている。如来の教えがわれわれに呼びかけているものは、もっと人間存在を信頼せよ、もっと人間存在を引き受けて立てということ。清沢満之先生は、それを引き受けられて、『生死厳頭に立つ』とおっしゃった」と述べられ、その原理に出会うためには、「聞」が大切であると話された。

引き続いての交流懇談会には、各界の学識者、ジャーナリストなど約50名が参加し、江尻静哉参務挨拶の後、弁護士青山周氏より祝杯の辞をいただき交流会がもたれた。席上、加藤智見氏（東京工芸大学名誉教授）、中澤忠正氏（TBS社長室顧問）、水島見一氏（大谷大学教授）から、当センターの活動への激励の言葉をいただいた。

※記念講演は、『現代と親鸞』（第26号・2013年6月1日号・1冊1,200円）に掲載の予定です。



第 7 回「親鸞仏教センター研究交流サロン」を開催（6月5日）

親鸞仏教センターでは、これまで関わりをいただいたさまざまな分野の有識者の方々と、一つの現代の課題を共有することにより、多角的に問題意識を深めていくことを目指して「研究交流サロン」を開催している。その第7回目を、さる6月5日東京国際フォーラム（千代田区）を会場に、「〈自己責任〉を問い直す―他者への温かな関心を取り戻すために―」というテーマで、東京経済大学教授の桜井哲夫氏から発題をいただき、大谷大学教授の藤枝真氏にコメンテーターとして口火を切っていただくかたちで開催した。

まず、桜井氏は「自己責任」という言葉が意味するものを語源に探り、また実際に公に使われ始めた事例を挙げながら、1980年以降の新自由主義の考え方と、それに伴う自由競争の名の下に、日本で「自己責任」という言葉が一般化したことを説明された。

また、特にアメリカ社会の現状をマイケル・ムーア監督の『シッコ』の映像を用いながら紹介し、さらに、その後追いをするかのように変貌する今日の日本社会や、世界を取り巻く新自由主義の弊害について警鐘を鳴らされた。

それを受けて藤枝氏からは、「自己責任」を問う他者はどこにいるのか、責任という言葉は誰に向けられているのかを、原発などをめぐる昨今の政治家の発言を織り交ぜて話された。また、震災直後のボランティア自粛ムードなどを引き合いに出され、連帯の力という角度から課題を展開された。

その後、約30名の参加者を交えて活発な意見交換がなされ、熱気のうちに閉会となった。

※内容は、『現代と親鸞』（第26号（2013年6月1日号・1冊1,200円））に掲載の予定です。



出版物のご紹介

◇『親鸞』と〈悪〉

一われら極悪深重の衆生 春秋社
当センター所長の本多弘之が講師の「親鸞講座」夏季一泊研修会での最近三年間の講義内容と、大震災を受けての所長の書き下ろしが掲載されています。本多所長を介して、親鸞思想が現代の根本的な闇と対峙する一冊です。
お問い合わせは
春秋社まで
TEL 03-3255-9611



◇『安田理深唯識論講義』

上・下巻 春秋社
安田理深氏が、世親菩薩の『唯識三十頌』の思想のもと「存在論的」な意識把握の大切さを解明しようとされた最晩年の講義をまとめた未発表の講義録です。当センター所長の本多弘之が監修しています。
お問い合わせは
春秋社まで
TEL 03-3255-9611



◇鈴木大拙『英訳 教行信証』改訂版 Oxford University Press

宗祖七百回御遠忌を機に、真宗大谷派からの依頼により鈴木大拙師が手がけられ、1973年に刊行された英訳『教行信証』が装いを新たに刊行されました。英訳を通し宗祖の思想と、大拙師の思想とがここに呼応します。
お問い合わせは
親鸞仏教センター
まで
TEL 03-3814-4900

